

艦隊これくしょん：ブラックフラッグ

水晶のドクロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ケンウェイの交易艦隊これくしょん  
略（奪）して艦これ

目 次

SEQUENCE01	『船出』	1
SEQUENCE01	『船出』	
SEQUENCE02	『ジャックドー』	
MEMORY01	『墓場の島』	
MEMORY02	『砲雷撃戦』	
MEMORY03	『波の下の町』	
MEMORY04	『隠された真実』	
MEMORY05	『エデン』	
MEMORY06	『真実はなく、許されぬことなど無い』	—
SEQUENCE03	『イナグア島の記憶』	
MEMORY01	『隠れ家』	
MEMORY02	『それで・・・ 食料は?』	
MEMORY03	『君の名は?』	
MEMORY04	『新生艦隊』	
MEMORY05	『アポカリップス』	
SEQUENCE04	『アサシン海賊が鎮守府に着任しました』	
MEMORY01	『二人の叢雲』	
MEMORY02	『修練の賜物』	

SEQUENCE01 『船出』  
SEQUENCE01 『船出』

叢雲 「あんたが司令官ね。」「船長だ。ケンウェイ船長」

エドワード 「エドワード・ジエームズ・ケンウェイ」

エドワード 「……俺はエドワード・ケンウェイと名乗ったか？」

叢雲 「なに言つてるの？」

叢雲 「あんた、しつかりしなさいよ。なんで自分の名前に疑問なんて持つちやつてるわけ？」

エドワード 「お前は何者だ？」

叢雲 「特型駆逐艦、5番艦の叢雲よ」

カチヤツ

叢雲 「なんなわけ！ 急に刀なんて抜いて、か弱い乙女をどうするつもり！」

エドワード 「見ろ。なにが映つている？」

叢雲 「可愛い女の子ね」

エドワード 「特型駆逐艦、5番艦？」

艦!?

叢雲 「……」

エドワード 「しつかりする必要があるのはお前もらしいな」

叢雲 「それにしても……」

「「（）」は……」

「「（）」だ（よ）？」

エドワード 「人の気配、文明の匂い、なにもありやしないな」

叢雲 「なんてこと！ あんたと無人島でサバイバルってわけ！？」

エドワード 「全裸じやないだけ随分マシだ」

エドワード 「染み付いた血と硝煙とラムとタバコの臭い、嗅いで

りや少しほは氣が紛れる」

叢雲 「下品な人ね」

エドワード 「海賊にまともな品性を要求するな」

叢雲 「海賊つて」

エドワード 「そんなことより何を持つてる？」

エドワード 「カトラスが2本。銃が4丁、火薬に弾。吹き矢のダートがバーサーク、スリープが4本ずつ。ロープダート。 . . こんなところか。」

エドワード 「お前は？」

叢雲 「やけに仕切るわね」

エドワード 「司令官なんだろ」

叢雲 「そうは言つたけど . . .」

エドワード 「何でそう言つたかおまえにも分からならなら、俺に

聞くな」

叢雲 「わかつたわ。 しれ、じやなかつた ケンウエイ船長」

エドワード 「歓迎しよう叢雲。 小さな王国へ」

エドワード 「連装砲？ 魚雷？」

叢雲 「そうよ！ なんか文句あるわけ？」

エドワード 「文句はないさ 確かに『艦』だ」

叢雲 「フリントロック銃と火薬があるなら火には困りそうじゃないわね」

エドワード 「あとは水と食料、状況の把握だな」

エドワード 「・・・よじ登つてくる」

叢雲 「えつ？ なによ」

エドワード 「火のほうは頼んだぞ」

叢雲 「ちよつと待ちなさいよ！ ・・・ つて消えてるし」

パチパチ

叢雲 「もうすぐ日暮れね。 いつたい何時間待たせるのかしら」

ドーン ドーン

叢雲 「爆撃!? いや砲撃ツ！」

??? 「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ

叢雲 「なんなの!?」

叢雲 （違う、何かはわかんないけど敵、それは分かるわ）

叢雲 「私の前を遮る愚か者め。沈めつ！」

??? 「グオオオオオ」 ズザー

叢雲 「やつた！」

ドーン

叢雲 「まだ居るの!?」

エドワード 「もう一匹だ!!」 バンバン! バン! バンツ!



エドワード 「幸運にも水と食料両方が手に入つたわけだ」

叢雲 「まさか・・・あんた！ なんなもの食べられるわけないじやない！」

エドワード 「ヤーマ」

ザシユ ガツガツガツ ・・・ズルツ ズズズツ

叢雲 「美味しいの？」

エドワード 「どんな味がする？ が正しい質問だな」

エドワード 「血だな。 鉄の臭いはいいとして、タール、油、それに火薬の味だな」

叢雲 「ゲツ・・・体壊さないの？ つていうか、死なないの？」

エドワード 「火薬入りのラムを飲むやつだつて居るんだ。 飲まないともたんぞ」

叢雲 「ホントに嫌なんだからね」

・・・ズズツ

「「悪くない（わ）」」

エドワード 「だろ？」

「「悪くない（わ）」」

エドワード 「だろ？」

エドワード 「・・・こいつは、胃か？」  
ズルズル

エドワード 「？ 何が入つてると思う？」

叢雲 「とてもけつたいなもの」

エドワード 「同感だ

気付けにもう一杯、いつとか?」 グビツ

叢雲 「ええ、もうわ」 グビツ

ザシユ ズルツ

金剛 「英國で産まれた帰国子女の金剛デース!

ヨロシクオネガイシマース!」

ブツー!!

「お前はなんだ!?」

「あんたなによ!?」

金剛 「英國で産まれた帰国子女の金剛デース!」

エドワード 「俺はウエールズのスウォンジーだ。お前は?

金剛 「・・・・・ 英國で産まれた帰国子女の金剛デース!」

エドワード 「叢雲」

叢雲 「いつでも撃てるわよ」 スチャツ

金剛 「Wait! Wait! 提督うー! 待ってくだサーカー!

」

エドワード 「叢雲」

スチャツ

エドワード 「今はいい。それより俺とお前。いま何語で話して  
いる?」

叢雲 「英語ね」

エドワード 「こいつは？」

叢雲 「日本語ね。もしくはルー語」

スチャツ スチャツ

金剛 「分かりました、英語で話すのでお二人とも銃を収めてはいただけませんか？」

エドワード 「物騒なバツクパツクも下ろすんだ」

ドサツ

エドワード 「これでまともに話ができるか？」

金剛 「あ、はい。私はバロー＝イン＝ファーネスで建造された金剛型戦艦一番艦の金剛と申します」

エドワード 「『艦』お前も艦か。」

金剛 「スウォンジーといえば、あれですね。えうつと… ウエールズと言えば妖精と魔法の国ですね是非とも行つてみたいと思っています」

エドワード 「無理するな」

金剛 「OKデース！ 英語で喋ると疲れマース！」

叢雲 「そっちじゃないから」

エドワード 「まあいい、通じる。意外にもな」

叢雲 「ホント意外ね。」

エドワード 「疑問は山ほどあるが、紹介しよう。こつちは叢雲。

俺はエドワード・ケンウエイ船長だ」

金剛 「それにしては船が見当たりませーン」

叢雲 「それよ！ なんか引っかかつてたの！」

エドワード 「…・・・・・」

エドワード 「俺の船だ、必ず俺の元へつてくるさ」

叢雲 「カツコついてないから。」

金剛 「なかなか C o o l だと思いまース」

叢雲 「それで話戻すけど、こゝは何処だつたのよ？」

エドワード 「絶海の孤島だ。 確かめてきた」

叢雲 「えええええ」

金剛 「O h s J e s u s」

叢雲 「で？ これからどーすんのよ？」

エドワード 「こゝの手の漂着には慣れてる」

金剛 「その時はどうやつて脱出しましたか？」

エドワード 「一度目は浜辺で商人を助けてその船に乗せてもらつた。 二度目は通りすがつた漁船に助けられた。 三度目は捕まつて投獄された。」

叢雲 「全部運任せじやない！」

エドワード 「・・・ 月がキレイだな」

「/?/? / / / / / /」

叢雲 「なによ！ その露骨な話題のそらし方！」

エドワード 「星は見にくいが、お前らが『艦』なら船乗りなら、星の見方ぐらい分かるだろ?」

叢雲 「へ?」

金剛 「南半球ネ」

エドワード 「そうだ。だがそれだけだ。周りに島? そんなもんはない」

叢雲 「ハア… 絶望的じやない。あいつらみたいに海の上が走ればよかつたのに。」

金剛 「エツ? できるヨ?」

「エツ!?

金剛 「ホラ! コレデース。喫水線!」

エドワード 「ブーツの底だろ、それは」

金剛 「ナニ言つてるんデース! 目を離しちゃNO! なんだからネ!」

・・・

叢雲 「立てるわね。水面に」

エドワード 「ああ」

金剛 「さあ、提督も叢雲もやってみてくだサーアイ」

叢雲 「やつてやるわよ!」

・・・

叢雲 「え? やつた! ウソ? 立てるわ!」

金剛 「提督もTry It!」

・・・

ボシヤン

金剛 「H A H A H A ! それはタダのブーツの底だつたみたいデース」

エドワード 「： チツ 期待した俺がマヌケだつたな。 金剛、今から英語で話せ。 ケン ウエイ 船長 な」

金剛 「Oh～～～ あ、ハイ。 了解しました。 ケン ウエイ 船長。 やはり貴方と私たちでは何かが違うのでしょうかね。 それが何かはわかりませんが、その違いがあなたの助けになると思っています」

叢雲 「少し笑つたぐらいで、そんなに怒らなくつてもいいじやないのよ」

エドワード 「イラツとしただけだ。 3時間もすれば好きなように喋つていいぞ」

叢雲 「チヨツと寒くなつてきたわね」

エドワード 「悪かつたな。 気の利かない男で。 コートとローブ」

叢雲 「コート！ // /

エドワード 「じゃあ、お前はローブだな」

金剛 「あ、どうも恐れ入ります」

叢雲 「むしろ昼間にシャツにローブに革鎧にコートつて熱くないの？」

エドワード 「くない」

金剛 「紅茶が飲みたいネー！」

叢雲 「3時間ぶりに自発的に喋ったと思つたらそれ？」

金剛 「提督うー 同じ英國生まれならワタシの気持ち分かってくれるデース」

エドワード 「気取った貴族の嗜みよりラムだ。 それカワインだが、今はこれだけだ。 ホラ」 スツ

金剛 「Oh~ なにかDangerな予感がしマース」

エドワード 「紅いぞ？」 グビツ

金剛 「どちらかと言えば黒いデース」

グビツ ・・・ グビツ ゴツゴツゴゴ

叢雲 「一気飲みつて・・・ 傍目で見るとそうと気持ち悪いわね。 それ二度と飲みたくはないわ」

金剛 「Y e a a a a a a a a a h !!!!!」

叢雲 「決めたわ！ 二度と飲まない！」

エドワード 「ヤバいやつだつたな」

金剛 「Oh~ もう朝デース。 叢雲、ワタシいつ眠つたんでしょうカ？」

叢雲 「た お れ て た の 分かる？」

エドワード 「水を見つけてきたぞ」

!!!!!!  
叢雲 「気配を消して近づいて来ないでよ。 びっくりするじゃな

い！」

エドワード 「剥ぎ取った浮袋に20㍑もつてきた。何日かは保つだろう。」

金剛 「Great！ さつそくいただぐデース！」

エドワード 「ん？」

金剛 「… 申し訳ございません。私の軽率な行動でご迷惑をおかけしたようで」

エドワード 「いい。 ああなるとは俺も予想できなかつた。 それより具合はどうだ？」

金剛 「それが不思議と調子はいいですね。 そう！ それはまるでバラの花を敷き詰めたシルクのベッドで朝まで愛し合つたあとに目覚めた昼下がりのようです！」

叢雲 「具合は、悪いわね」

エドワード 「主に頭がな」

エドワード 「夜のうちに皮に油と肉、骨、内臓と切り分けてある。それに女が背負つっていたデカイ何かだ。 それと女」

叢雲 「女って。 いつまで死体と一緒に眠るつもり？」

エドワード 「その辺の枯れ木に括り付けて流せばいいだろ」

金剛 「そうですね。 いくら敵と言えど朽ちるままにしておくのは礼を失していますね」

エドワード 「こんなもんか。」

叢雲 「成仏しなさいよ」

金剛 「(ゞ)冥福をお祈りします」

エドワード 「生まれてきた地獄へ還るがいい」 ガンツ！

叢雲 「蹴り飛ばして流すの!? 亂暴すぎじゃない!?」

エドワード 「海賊流だ」

エドワード 「あの女の背負つてたバツクパツクだが・・・」

叢雲 「ナニよ?」

エドワード 「まだ温かい」

「ゲツ」

金剛 「つまりまだaliveと言うことですかー!?!?」

叢雲 「撃つてきたりしないの!?」

エドワード 「瀕死なんだろう。 撃てるならもう夜のうちに撃ち殺されてるさ。 それに使えそ豆だからな」

金剛 「だつたらワタシが背負つてみるデース！」

叢雲 「やめときなさい。 嫌な予感しかしないわよ」

エドワード 「やつてみろ。 何かあれば俺が責任を持つて・・・

(殺す)

金剛 「愛しの提督のためにガンバルネー！」

エドワード 「いつから愛おしくなった?」

叢雲 「飲んだ血に惚れ薬の作用でもあるのかもね」

エドワード 「金になるな」 ニイ

叢雲 「わたしには効かないみたいだけどね」

金剛 「コレはH E A V Y デース！」  
バタン

叢雲 「無謀ね」

金剛 「・・・・・」 スクツ

エドワード 「立てるじゃないか」

金剛 「ククク・・・ 札ライウ ゾ アラタナ 船体ヲ アタエテ  
クレタ 事ヲ」

スチャツ パン！

金剛 「W a i t ! I t , s a j o k e ジョークデース！」

エドワード 「空砲だ」

金剛 「死んだかと思いましター！」

叢雲 「こんな状況で脅かさないでよ！」

叢雲 「それにしてもよくとつさで空砲なんて撃てたわね」

エドワード 「色が変わらなかつた」

叢雲 「色？」

金剛 「見てくだサーアイ！ クジラでもつかみ取りできそうな大きな手デース！」

叢雲 「せいぜいイルカでしょうね」

エドワード 「それで金剛。 さつきの罰だ。 そのでかい手で木を切つてきてイカダを作るのと、 英語で喋るのどっちがいい？」

金剛 「O h ū モチロン！ イカダネー！」

叢雲 「役に立つのね」

エドワード 「俺の勘は当たるんだ」

叢雲 「準備完了ね」

エドワード 「叢雲 金剛 よくやつてくれた」

金剛 「P O W E R O F L O V Eデース！」

エドワード 「集めた水、トカゲやウミガメはこんなもんだ。  
要は5日以内に陸地を見つけられなきやみんな死ぬって事だ」

叢雲 「ホントにいい？ 私たちが助けを呼んできてあげてもいい  
のよ？」

エドワード 「置いてけぼりはもう沢山さ」

金剛 「叢雲と交代でイカダを曳けばいいんですネー？」

エドワード 「張つてみた皮の帆はおまじない程度だな」

叢雲 「ふふつ。いよいよ戦場ね」

エドワード 「敵には会いたくないがな」

叢雲 「口癖みたいなもんよ」

金剛 「私たちの出番ネ！ F o l l o w m e ! 皆さん、ついて  
来て下さいネー！」

エドワード 「それしかやりようがないからな」

金剛 「言わなきやいけない気がしたネー」

エドワード 「風を捕まえるんだ！」

「帆船じゃないわ（ネ）！」

エドワード 「癖だ」

叢雲 「髪をたぐる風の心地よさ」

金剛 「海の香りと雰囲気は心が安らぎマース」

「それに可能性の匂いも」

エドワード 「それが船の醍醐味さ」

## SEQUENCE 01 『船出』

男 「深海棲艦が確認されたのは、2013年だったよな？」

「そうだね」

男 「海賊の黄金時代原因、アン女王戦争の終結は？」

女 「1713年だね」

男 「300年!? 何だよこの開きは!？」

女 「ははん。さては君バカだね。分からぬから調べるのが任

務じやないか」

男 「よくわからぬことは秘宝の仕業。便利だな」

女 「だからミンナ欲しがるんだよ」

女 「300年前の男が居るほうが、WWIの軍艦が艦娘なんか

になつてゐるよりは現実味あるよね？」

男 「どつちもねーよ！」

# SEQUENCE02 『ジャックドー』 MEMORY01 『墓場の島』

金剛 「あっちデース！」

叢雲 「どーセまたナニか居るんでしょう？」

エドワード 「居るな、間違いなく」

エドワード 「見えたぞ」

叢雲 「これまでのパターンだとそうせまた増えてるんでしょう

ね」

エドワード 「分かつてきただじやないか。 8、9… 12だな」

金剛 「O Hゝ 絶望的デース」

叢雲 「ナビゲーター役はアンタでしょ！ だいたいねえ…」

エドワード 「シツ 気づかれる。 金剛、いつもどおりうねりに身を隠してやり過ごせ」

叢雲 「このまま金剛の言うとおりに進んでたら化物の巣に突っ込まれるわよ」

エドワード 「そいつが狙いさ」

叢雲 「ハア!?」

金剛 「C R A Z Y!!」

エドワード 「飢えと渴きで死ぬよりは随分マシだろ？」

叢雲 「マシな死に方を選ぶつて話なの？」

金剛 「make loveもせずに死ねませーン」

エドワード 「記憶も確かじやないやつが3人、外洋のど真ん中。命以外に何が賭けられる?」

金剛 「ワタシのLifeは提督のモノデース!」

叢雲 「いいわ! 私も賭けてやるわ! アンタにね!」

エドワード 「倍以上にして返してやるさ!」

叢雲 「あんたは自分の記憶については何か話せるわけ?」

エドワード 「1693年スウォンジーで生まれたこと、私掠船員から海賊になつて42で死ぬまで」

叢雲 「幽靈!?」

金剛 「ZOMBIEかもしだまセーン」

エドワード 「駆逐艦に戦艦にゾンビか、なかなか面白い取り合わせだ」

エドワード 「まあ、戦い方が体に染み付いてるなら何の問題もないさ!」

金剛 「そろそろ、のような気がしマース」

叢雲 「よく分かるわね。不気味ね」

エドワード 「帰巣本能つてやつだな」

叢雲 「やっぱり生き物なの? 生きたバツクパツクつて余計不気

味じやない」

金剛 「ワタシのアンはいい子デース」

叢雲 「・・・名前、付けたのね」

エドワード 「その名は、避けてほしかつた」

エドワード 「陸地が見えたぞ。・・・何だあれは？」

金剛 「ワタシも見たいデース。」

エドワード 「ヒトの望遠鏡を「私もつ」

叢雲 「アレ船よね？」

エドワード 「ああ。初めて見る種類の船だが」

金剛 「船の墓場みたいデース」

エドワード 「潮流に流されて漂着したやつが、数十隻？ ありえ

ない」

叢雲 「あいつらの仕業なの？ 何のために？」

エドワード 「趣味だろうな。俺も集めてた」

「ない（デース）」

エドワード 「しかし、好都合だな身を隠せる場所が増えた。それにもうすぐ夜だな」

金剛 「P l a nはどうするつもりデース？」

エドワード 「俺が騒ぎを起こす。お前らはそのすきに島に上がれ」

叢雲 「合流場所はどうすんのよ？」

エドワード 「逃げ回れ、見つけ出してやる」

叢雲 「どうやって!?」

金剛 「Power of Loveデース！」

エドワード 「ああそりだな」

叢雲 「投げやりね」

エドワード 「とりあえず日が暮れるまで、お祈りの時間さ」

金剛 「ここで見つかったらDeadEndネー！」

エドワード 「そろそろ時間だな。」「ドボン

叢雲 「飛び込むの!?」

金剛 「漂着した船まで結構距離ありマース」

叢雲 「泳ぐの速いわね。 カトラスとか銃とか、フル装備よね」

## M E M O R Y 0 2 『砲雷撃戦』

エドワード（甲板に気配はないな。こいつは軍艦か・・・）

エドワード（マストの上だな・・・）

ヒョイヒョイ フン ハツ ウ“ーン” ヒョイ ダン

キー!!

エドワード「あいつは・・・？町か？まるでポートロイヤルだな」

エドワード「7、8か。海の上ほど数が居ないが、あとは何匹湧いて出るか。」

エドワード「女の姿のやつが居るな。先ずはあいつだな。バー

サークダートが効けばいいが」

フツ ピシュン！ スパンツ

女「e a u u u u Q! “W#! E\$R%FG&H,  
(JMK) <>=?」

ドーン ドーン ドーン ドーン ドーン

エドワード「おつと。効いたはいいが、無茶苦茶に撃ちやがる。身を隠すか」

!Q " W#ED\$F%G&, HJ () M<>=? a" s#d\$f  
%g&, h j (9K0: - /Q12W3え4#\$sd f, g& (b  
n )

ドーン ドーン ドーン ドーン ドーン ガラガラ

・・・

女 「グオオオオオオオオオオ・・・」

エドワード 「女を狙つて殺すと氣分が悪いな。 いや、すぐに慣れるか・・・」

タン ヒュー バサン

エドワード 「死体と船の残骸が散らばつたな。 二人が流れ弾で死ぬようなたまじやないな」

ギヨイン バスン

??? 「グ」

エドワード 「でかいやつでも首の骨を切れば死ぬか」

エドワード 「二人を探すか。 痕跡はあつちの船の艦橋だな」

ヒヨイヒヨイ フン ハツ ウーーン ヒヨイ ダン

「ハアハア・・・」

エドワード 「死にそうな顔だな」

叢雲 「ヒッ！ 脅かさないでよ。 船はぼろぼろになるし、もうダメかと思つたんだからね」

エドワード 「ずいぶん弱気になつたじやないか」

エドワード 「それで金剛は？」

叢雲 「船の残骸が落ちてきて、それから・・・」

エドワード 「死んだか」

叢雲 「何でそんなにあつさりと！ 仲間じやなかつたの!?」

ドーン

エドワード 「えうでもないらしい。運はないみたいだがな」

金剛 「B u r n i n g L o v e!!」 ドーン

ギヨイン ザシユ

エドワード 「愛を語るならベットの中だけしておいてくれ」

金剛 「W O W! 一番に探してくれたテース!

」

エドワード 「いや、叢雲はまだ追いついてないだけだ」

叢雲 「まつたく、あんたどういう動きしてるの!? 昆虫なの?」

エドワード 「一流の船乗りさ」

エドワード 「再会を喜ぶ暇はないぞ」

叢雲 「合流することに気を取られすぎてたわ」

エドワード 「あれだけの騒ぎで集つたのがこれだけだ。ここに居るのはこれで全部だろ」

エドワード 「お前らも、ういうのは嫌いでもないだろ?」 シヤ

キーン シャキーン

ガシャンガシャン

金剛 「撃ちます! F i r e!」

叢雲 「沈みなさい!」

ドーン ドドン パンパン ザシユ

エドワード 「雑魚は一瞬だがタフな女が何人かいるな。

叢雲!

魚雷は?」

叢雲 「魚雷なの! 海の上でしか使えないの! 分かってるの!<sup>!?</sup>」

エドワード 「だつたら投げろ!」

叢雲 「どうなつても知らないんだから!」 ポーイ

ドドン!

エドワード 「?」

叢雲 「だから言つたじやない!」

エドワード 「狙えないならやれることは一つだ。

金剛!」

金剛 「E x a c t l y!」

エドワード 「もう一度投げろ!」

エドワード 「金剛!」

金剛 「A y e s i r!」

ゴツ

叢雲 「蹴り飛ばすの!?」

エドワード 「相手を当たる位置に放り込むだけだ」

金剛 「G r e a t n e —!」

ドドン!

金剛 「次のヤツでF I N I S Hデース!」

叢雲 「邪魔よつ!」

ドドン ドーン  
バシュー モクモク

ザグツ ザクツ

エドワード 「弾幕と煙幕の合せ技ってやつだ」  
叢雲 「よくあんな状態で相手が見えてるわね」

エドワード 「音を見るんだ」

叢雲 「他のやつが来る前に移動するわ」

エドワード 「ちょうど町があった。ポートロイヤルのように水没してたがな」

叢雲 「ポートロイヤル?」

金剛 「1692年に地震と津波で水没したソドムと呼ばれたジャマイカの町デース」

## MEMORY03 『波の下の町』

叢雲 「イギリス近代史の話はおわった？ もう着くわよ」

金剛 「コレはひどいデース」

叢雲 「生存者なんて当然居ないでしょうね」

エドワード 「酒を探そう」

金剛 「紅茶デース！」

叢雲 「それより先に食べ物でしょ！」

金剛 「残つた建物があつてよかつたデース」

叢雲 「そうね。 生ものは腐つちゃつてるけど、 缶詰とかレトルトは食べられるわね」

エドワード 「このビールは、 イケるぞ」 ゴツゴツゴ

叢雲 「いつまで飲んでんのよ！」

エドワード 「まだ6本めだぞ？」

金剛 「W.O.W！ コレ見てくだサーア！」

叢雲 「カレンダーネ」

エドワード 「2012年12月・・・」

金剛 「食べ物の腐り方から見て、 かなり経つてマース」

叢雲 「船長が死んだのは？」

エドワード 「1730何年だつた。 お前らはどうだ？」

叢雲 「進水日は1928年だつた気がするわ」

金剛 「1912年デース」

エドワード 「進水日、ね。 100歳だな、おめでとう」

叢雲 「おめでとう。金剛」

金剛 「実感がわきまセーン」

エドワード 「ここがどこか手がかりになりそうなものは？」

叢雲 「住所の書かれた封筒は見つけたけど？」

エドワード 「フランス語だな・・・ ヌーベル・カレドニア・・・」

」

金剛 「ニユーカレドニア！ 天国に一番近い島デース」

エドワード 「地獄に一番近い島の間違いだろ？」

エドワード 「後はスループでもあればここから抜け出せるな」

金剛 「どこへ向かいますか？」

エドワード 「あれだけの船がやられてるんだ。大きな島でもまともに機能しないだろうな」

叢雲 「つてことは、南赤道海流に乗つてオーストラリアを目指すつてわけ？」

金剛 「それからどうするデース」

エドワード 「さあな？」

「・・・」

叢雲 「ねえ。船長」

エドワード 「・・・ なんだ？」

叢雲 「私たちつて艦なの。軍艦なの」

エドワード 「そう言つていたな」

叢雲 「だからね。記憶がないの戦うこと以外」

エドワード 「何にだつてなれるさ。俺でさえやり直せたんだ」

金剛 「だつたらワタシは提督のお嫁さんになりマース！」

エドワード （俺は、船長、だな・・・）

金剛 「いいヨツトが見つかってよかつたデース」

エドワード 「コレならしばらくの航海にも耐えられるな」

叢雲 「短いに越したことはないけどね」

エドワード 「おいちよつと待て。 あいつは・・・」

金剛 「どうしたデース。 もうすぐ夜明けデース！」

叢雲 「ただの転がってるトラックじやない。ほつときなさいよ」

エドワード 「大事なことだ。 出発は延期だ！ 何故か分かるつて  
やつだ」

叢雲 「A b・・・ アブスターゴ？」

# M E M O R Y 0 4 『隠された眞実』

ガシヤーンガシャーン ガラガラ

金剛 「H e y ! 提督うー 何を壊しているデース」

叢雲 「急に血相変えてトラックを荒らしだしたりして何があるつていうの? 」

エドワード 「こいつを取り出してたんだ。俺が知ってるのとは少し違うみたいだが」

金剛 「C r y s t a l s k u l l デース! 」

叢雲 「キレイ」

ペカー

エドワード 「ん?」

叢雲 「何か光ってる! 」

金剛 「眩しいデース! 」

金剛 「壁に顔ガ! 」  
??? 「おいおいおい! こいつは驚きだ。 レベツカ! 見てくれよ! 」

エドワード 「お前は一体誰だ? 」

??? 「エツ? ウソ! マジ、エドワード・ケンウェイよね!? 」

エドワード 「おい! 答える! 」

??? 「おつと。悪かった。ボクの名前はショーン・ヘイスティングス。 彼女はレベツカ。僕らも君と同じさ」

??? 「レベツカ・クライインよ。 確認だけど、あなたエドワード・ケンウェイよね? 」

エドワード 「俺のことを知つてゐるのか？」

ショーン 「伝説の大海賊にして、偉大なる導師エドワード・ケン  
ウエイ！」

レベッカ 「観測所やエデンの布を見つけ出したのよね」

叢雲 「で、誰なのよ、いつら」

金剛 「お知り合いですか？」

エドワード 「同類ではあるらしい」

エドワード 「誰でもいいが、答えてもらおう。死人が生き返るつて事はありえるのか？ それも300年も前の」

ショーン 「それが可能なエデンの果実はアンクが報告されてるけど、300年となると別のエデンの果実だ」

レベッカ 「ちょうどそれを探してた彼の番号からかかつてくるから、びっくりよね！」

エドワード 「彼？ 誰だ？」

レベッカ 「アブスター『ゴ』リサーチアナリストとして働いてたんだけどね。私たちのせいだ上層部と揉めちゃって」

ショーン 「死にそうになつてたところを僕らが助けて、仲間に加えたつてわけだ。なかなか優秀でね。第2次大戦、正確には太平洋戦争に原因になつたエデンの果実を探してもらつてつたんだ」

エドワード 「それで見たかったのか？」

レベッカ 「フィジーに到着してから彼とは2ヶ月以上連絡がないのよ。太陽フレアの影響で通信網はズツタズタ、無事だつたとしてもすぐ連絡が取れるわけじやないから」

エドワード 「水晶の髑髏は通信装置として機材につながれてたわ

けか

—

レベツカ 「たしかにかつて来たりし者の技術なら電波干渉もなく長距離通信が可能ね」

金剛 「あの状況が飲み込めないんですが、説明してくださいますか？」

叢雲 「そうよ！ なんのエデンとかなんとか！」

ショーン 「構わないかい？」

エドワード 「俺がこの場所にいるのが秘宝のせいなら、こいつらも。被害者だな」

エドワード 「大昔、先史時代に生きてた奴らが遺した迷惑な秘宝、そいつがエデンの果実さ。」

ショーン 「現代科学を遙かに超えたその力を使つて世界を征服しようとしてるアブスター哥、またの名をテンプル騎士団。それ止めるのが僕たちアサシン教団つてことだね」

叢雲 「ずいぶん単純な話になつたわね」

金剛 「それで第2次大戦と太平洋戦争の原因というのは何だつたんですか？」

ショーン 「歴史家に聞くには少し難解過ぎる質問だね。 でもアサシンとして答えるなら、増えた人口を減らし、支配を拡大するため騎士団が火を付けたつてことだね。でも、それじや太平洋戦争の説明はできない。 そこで出てくるのが死者を蘇らせる力を持つたエデンの果実となるわけだ」

エドワード 「……どうした？」

金剛 「殺すためだけの戦争なんて……」

叢雲 「一体何の権利があつてそんなことを！ · · · 」

エドワード 「それがこの世界だ。それが俺たちの敵だ」

エドワード 「まだ聞きたいことはあるが、また連絡する」  
ショーン 「だったら、僕たちも山ほどある聞きたいことを次までにまとめとくよ」

レベッカ 「彼女たち相当顔色悪そうだけど大丈夫なの？」  
エドワード 「みすみす死なせやしない」

エドワード 「さあ、行こう。宝探しの時間だ」

叢雲 「勝手に行つてきなさいよ · · · 」

エドワード 「行かないのか？ 金剛お前は？」

金剛 「乗りかかった船デース！」

叢雲 「ついて行かなかつたら置いていくとか言うんでしょ！」

エドワード 「いや。待つ」

叢雲 「わかつたわよ · · · 」

## MEMORY05 『エデン』

金剛 「車からケーブルが続いてマース・・・」

エドワード 「入江の方だな」

金剛 「洞窟<sup>ズ</sup>テース！ 宝探<sup>ズ</sup>テース！」

エドワード 「見えてきたぞ」

叢雲 「欠け一つもないわね」

金剛 「キレイな石積みですね。何で出来ているんでしょうカ？」

エドワード 「こいつで七万年以上経つてるはずだ」

金剛 「太古の神秘<sup>ズ</sup>テース」

エドワード 「研究資料何かは残っているはずだ。探そう」

エドワード 「まだ奥まではあるな・・・」

金剛 「H e y！ 提督うー！ 人が居マース」

エドワード 「生きてるんだろうな!?」

??? 「ああ、天使だ・・・ 天使が迎えに・・・」

金剛 「ナニ言つてるデスカ？ 生きてマース」

エドワード 「そいつが生存者か。話を聞こう・・・」

??? 「・・・ヒツ！ 悪魔だ・・・ 殺される！」 ダツ

金剛 「O U C H ! 突き飛ばさないでくだサーアイ！」

??? 「来るな！ アサシン！ どうせ話したところで、『最後に頼みがある。黙つていろ』グサツつてなるんでしょ！」

ガラガラガラ

エドワード 「通路の機材を崩しやがった！ ・・・いつものことだな」

ダダツ タン フン！ ハツ！ 「待て！ 殺されたいのか!?」  
ターン！

??? 「・・・ ここまでくれば・・・」

ドサツ シヤキーン

エドワード 「話してもらおう。」

??? 「ごめんなさい！ 私は騎士じゃないんです！ エデンの果実に興味があるだけの研究者なんですから殺さないで・・・ お願ひします」

エドワード 「俺は正直者が好きなんだ。あんたはどうだ？」

??? 「それはもう。正直村の出身ですから」  
ギリギリ

??? 「ああ、すみません。私はDr. リネット・ケイン」

エドワード 「ドクター、ここにあるのは死者を蘇らせるエデンの  
果実なのか？」

ドクター 「情報を実体を持つ形で復元することができるという仮  
説は建てられていますが、定かじやありません。その根拠を見せま  
しょう。拘束を解いてもらつても？」

エドワード 「いいだろう。おかしなことをするなら膝を吹き飛ば  
す」

ドクター 「ではさつきの部屋に戻りましょう」

エドワード 「通路はお前のせいで塞がつてゐるがな」

ドクター 「あ、この地図を見てくださいよ。これがグレートカ  
タストロフ以前のこの周辺の衛星写真」

エドワード 「グレートカタストロフ？」

金剛 「聞き覚えのない単語ですね」

ドクター 「知らない!? まさか死者が蘇るつて……」パン!

ドクター 「ヒツ！」

エドワード 「聞いているのは俺たちだ。左手は空砲だが、右手のほうが狙いややすいぞ」

ドクター 「…… 答えます！ 答えますとも！ 2012年12月に起こつた太陽フレアの影響で地殻変動が起こつて、それから全世界で群発地震が起こつて、津波が世界中の沿岸部を飲み込んだつていうのがグレートカタストロフです」

叢雲 「最近酷いことしか聞いてないわ……」

ドクター 「続けます。そしてこれが現在の航空写真。

これを取るために無人偵察機が何十機も潰されましたさらにこれがかつて来たりし者の生きていた七万年前の海岸線。ほら現在の海岸線とぴつたりでしょ？ 仮に地殻変動の影響なら昔と完全に一致するなんてことはありえません！だからこの世界を七万年以前に戻そうとする力を推測しているわけですよ！ そのトリガーがグレートカタストロフなのは確実でしょ。それと深海棲艦と呼ばれる化け物たちは2013年に入つて確認され始めたんだけど、この島の周辺の変化はそれと同時期なのそれでね。それでね。秘宝の制御下で何かしらの活動を行つてるんじゃないかつてさらにこの遺跡は放射年代測定にかけると約70年前なんです不思議でしょ？ この遺跡が70年前に作れたかつてモチロン不可能ですよ。その時は？ そうです！ 太平洋戦争中です」

「「・・・」「」

エドワード 「ドクター、ストップ」

ドクター 「フヒツ！ すみません研究のこととなると喋りすぎてしまつて」

金剛 「つまりどういうことですか？」

エドワード 「ここにある秘宝を使えばあの化け物たちを殺して回らざに済むんだろ？」

ドクター 「あなたたちはあいつらを!? 深海棲艦を殺せるんですか!?」

エドワード 「生きてるんだ鉛玉を喰らえば死ぬだろ？」

叢雲 「死ぬわ」

金剛 「DEATHテース」

エドワード 「ちなみに斬つても死ぬ」

# M E M O R Y 0 6 『真実はなく、許されぬことなど無い』

エドワード 「それで秘宝はここにあるのか？ あるものを手に入れば仮説なんて意味が無い」

ドクター 「メモリーが確かなら。でも、トラップがあるんで何人も犠牲に」

エドワード 「見つけてくる途中まで案内しろ」

ドクター 「ヤツタ！ ホントに!? いいんですか!?」

叢雲 「大丈夫なの？ あんた死なないわよね？」

エドワード 「なに、いつものことだ」

ドクター 「ここです。あっちに見えるのが多分、いやキットそうです!!」

ビー――――ビー

金剛 「触ると死ぬやつデース」

エドワード 「落ちても死ぬな」

エドワード 「待つてろ取つてくる」

フン！ ハツ ガシヨン ギーゴゴゴ ガチャン ハツ オ  
オウ ヒヨイ タン ガコン

エドワード 「こいつで道ができた」 スタン

金剛 「W o w ! C o n g r a t u l a t i o n s ! 」

ドクター 「ありがとう！ これで！ 秘宝がこの手に！」

エドワード 「俺のだ。 間違えるな」

ドーンドーン

エドワード 「こいつは砲撃音か!?」

金剛 「そうみたいデース」

ドクター 「遺跡の起動が何かシグナルになつたのかも！」

エドワード 「先に片付けよう」

金剛 「行けます！」

エドワード 「叢雲、お前はやれるのか？」

叢雲 「何を信じて、何のために・・・」

エドワード 「真実はなく、許されぬ行為はない」

叢雲 「どういう意味よ!?」

エドワード 「戦うこと、生きることに意味なんて無いさ。だがな、俺は生きてなきや信条の意味も理解できず、何者にもなれないまま死んでいた」

エドワード 「お前がもう戦えないならそれでいい。俺たちが代わつてやる」

叢雲 「見くびらないでよ！ やつてやるわよ！」

叢雲 「それよりも！ あんたは秘宝を手に入れなさい！ あいつらがそれで止まるなら楽でしょ！」

金剛 「叢雲が元気になつてよかつた『デース！ 提督もH u r r y u p急ぐデース！』」

エドワード 「持ちこたえろよ！」

叢雲 「誰に聞いてんの!?」

エドワード 「急ぎう！」

ドクター 「ハアハア……ちよつと運動は苦手なんですが……」  
「

エドワード 「ついてこいとは言つていない」

エドワード 「こいつは……見たことがある気がする。……記憶の、封印？」スツ

〈サンプル17プロジェクトへようこそ〉

〈ヘイザムかコナーか ワー！オー！ 行くぞ 野郎ども!!〉

エドワード 「……は？ イナグア島の酒場か……」「

アドウェール 「どうした？ 船長」

サツチ 「ケンウェイ！ 飲み足りねえのか！」

メアリー 「それより飲み過ぎじやないのか？」

アン 「ここは酒場よメアリー、飲んでくれないとこつちの商売上がつたりだわ」

ハイザム 「父さんそれよりもボクと遊ぼうよ！」

ジエニファー 「私が遊んでもらうの！」

キヤロライン 「兄弟なんだから二人で遊んでもらえばいいじゃな

い」

エドワード 「なるほど天国に一番近いってのは嘘じやないらし  
い・・・ 僕が天国行きとは思わなかつたがな」

エドワード 「悪くない酒だ・・・」グビツ！

エドワード 「だが！ 悪魔には地獄がお似合いさ！ 船を出すぞ  
！」

船長 「やあつたああああああああ！！！」

エドワード 「メインを張つて風を受けるんだ！」

船員 「船長！ 戰闘だ！」

エドワード 「黒いほうが敵で白いほうが味方だ！」

船員 「了解だ！ 船長！ ジャックドーコーにありつてことを見

せてやろうぜ！」

エドワード 「臼砲だ！ 放て———!!」

ドドン ヒューン スパンスパンツ

叢雲 「砲撃!? どこから!?」

エドワード 「またせたな！ 行くぞ———!!」

船長 「うおおおおおおおおおおおおお!!」

金剛 「ホントウに船長だつたデース！」

エドワード 「撃てえええええ !!!」 ドドドド

船員 「海の藻屑だあ!!」

エドワード 「よく持ちこたえたな」

叢雲 「当然の結果よ」

金剛 「敵が撤退していきマース！」

エドワード 「歓迎しよう。叢雲、金剛。我がジャックドー国へ」

叢雲 「ところで・・・ 島おかしくない？」

金剛 「形が変わつてマース!!」  
エドワード 「イナグア島だな、こいつは」

# SEQUENCE03 『イナグア島の記憶』 MEMORY01 『隠れ家』

叢雲 「やつたら時代がかつてる場所ね」

エドワード 「こいつが300年前の海賊の隠れ家さ。案内が必要か？」

ドクター 「ぜひ！」

叢雲 「どっから湧いてきたのよあんた!?」

エドワード 「消し飛んだのかと思つてたぞ」

ドクター 「その可能性はありました。 実体を持つて再生す……

「とまれ」

エドワード 「聞きたいことはあるが、今はいい」

エドワード 「右が酒場、その裏が道具屋、向かいが娼館だ。ちなみに男娼は居ない」

叢雲 「誰がそんなこと行くつていたのよ!?」

エドワード 「確かに上がつたら、飲み食い騒いで歌つて、呆けた頭で顔もわからないような女を抱いて眠る。それが海の男の生き方だ」

金剛 「ワタシから目を離しちゃN.Oなんだからね！」

叢雲 「そんなことよりシャワーを浴びたいんだけど」

エドワード 「丘の上に白い屋敷があるその裏手に水場がある」

叢雲 「覗かれたらどうすんのよ？」

エドワード 「撃ち殺せ」

叢雲 「へ？」

エドワード 「そうすりやビビつて覗こうなんてしやしないさ。だが、優秀な船員が減るのは避けたい。だから見せしめに鼻を削ぐつていう手もある。屋敷の中は好きに使え」

叢雲 「わかつたわよ！ 水汲みからやれってことでしょ」

金剛 「それかD o n, t m i n dデース！」

叢雲 「わたしは気にするの!!」

エドワード 「お前は？」

金剛 「紅茶デース！ T e a T i m eにしまショー！」

エドワード 「道具屋にはあるかもな」

金剛 「G r e a t！ 探してきマース！」

エドワード 「飲んでるやつを見たことはないが」

船員 「船長！ 浜辺に何か打ち上げられてる！ 海にも浮いてるぞ！」

エドワード 「深海棲艦と言つていたな・・・」

ドクター 「それは駆逐艦とか呼ばれているやつですね」

エドワード 「艦、こいつらも艦か・・・ それで何なんだ?」

ドクター 「さあ?」

エドワード 「でかいやつは腹を裂いてみろ何か出てくるかもしけん! 残りはバラして塩漬けにしておけ!」

船員 「船長! 女のほうもですかい!?」

エドワード 「考えなくても分かんだろう!!」

ドクター 「息があるのは私が見ます!」

エドワード 「そつちのドクターだつたのか

ど」  
叢雲 「なかなかいいベッドだつたわ。海賊の隠れ家にしてはだけ  
エドワード 「昨日はよく眠れたか?」

金剛 「汗臭かつたテース!」

エドワード 「そいつは俺のベッドだ」

金剛 「W O W! ジヤあ今晚も使いマース!」

叢雲 「じゃああなたはどこで寝てたの?」

エドワード 「藁山」

「は?」

エドワード 「藁山」

叢雲 「そう言えばあいつら、あれも艦なのね」

エドワード 「お前が最初に倒したでかいやつは駆逐艦と呼ばれて  
いるらしい。仲間だな」

叢雲 「・・・・・」

金剛 「D o n, t m i n d」

叢雲 「気にするわよ！」

エドワード 「それで二番目の女が戦艦。名前までは分からなかつ  
たが、新種だろうと」

金剛 「Oh! 船長から貰ったレアな装備、テース！ アンは一生  
大事にしマース！」

叢雲 「あげるつもりは無かつたとお思うけどね」

エドワード 「アンね・・・」

エドワード 「駆逐艦、軽巡洋艦、重巡洋艦、戦艦、航空母艦がある  
らしいが、スクーナー、ブリッジ、フリ・・・ 「帆船に直さなくとも  
分かるから」

エドワード 「それでそいつの装備が艦装だと」

金剛 「船ですからネー」

エドワード 「面倒は船大工がまとめて引き受ける。見てもらいた  
けりや持つていけ」

叢雲 「よくできるわねそんなこと」

エドワード 「俺が日本語を喋れたりできるはずのないことができるのは記憶があるからだろうと」

金剛 「Memoriesですか？」

エドワード 「生き返ったとき別の記憶が取り込まれるつてのがドクターの説だな」

叢雲 「別人の記憶があるつていうの？」

エドワード 「ああ、俺の場合ショーンの言つていたアサシンの記憶だろう」

叢雲 「私たちが人としての生活を送れるのも誰かの記憶つてわけ？」

金剛 「打ち上げられたのはどうなりますか？」

エドワード 「ドクターが見てくれているが、意識があつても記憶が抜け落ちてるみたいだ。名前どころか喋り方も忘れたやつが要る始末だな」

金剛 「Oh, HEAVYデース」

エドワード 「放つておくわけにもいかないだろう」

金剛 「Seamanshipですネー！」

叢雲 「シーマンシップの敵みたいな人間だけどね」

エドワード 「今日はジャックドーを出すぞ」

金剛 「哨戒<sup>ゲ</sup>テース！」

エドワード 「いや釣りだ」

エドワード 「ものども声を上げろ！」

^N o w    w e    a r e    r e a d y    t o    h e a d    f o r  
h e    H o r n,  
W e i g h,    h e y,    r o l l    a n,    g o! <

エドワード 「ふん。 舶輪の重さ・・・ 変わらないな。 どんな嵐  
だろうと、艦隊だろうと俺のジャックドーなら」 フフン

金剛 「S h i t! もとい嫉妬！」

叢雲 「浸つてるところ悪いけど、なんでこのタイミングで釣りな  
わけ？」

エドワード 「ジャックドーの船員が40人、 拾つた奴らが20  
人。 それから増えるかもな」

金剛 「S u p p l yは大切ネー！」

叢雲 「油と火薬の味の肉を食べるよりマシつてことね」

エドワード 「ウジの湧いたビスケットよりもな」

エドワード 「深海棲艦のせいで海上交易路もろくに機能しなくなつて、海賊家業も無理だからな」

叢雲 「自給自足生活つてわけ？」

エドワード 「方法は考へてるところさ」

金剛 「最初はヨツトで大きな島へ向かう予定でしたネ」

エドワード 「今の状況なら所詮島だ、洗い流されて日干しにされ

てるだろう」

叢雲 「じゃあ、みんなでオーストラリアに移住とかなわけ？」

エドワード 「それも悪くないな」

「・・・・・」

エドワード 「漂着した奴らをどうするかもあるぞ」

金剛 「全員G i r l sばかりだつて聞いたネ」

叢雲 「考えがあるわ。武器でも持たせてみるつていうのはどう

？」

エドワード 「危なつかしいな」

金剛 「武器を持つた素性のわからない人間というならみんな同じですよ」

エドワード 「確かにな。ムカつくやつの頭をいつでもぶち抜けりや、生きていきやすくなるなりや、生きていきやすくなるなりや、生きていきやすくなるなり」

エドワード 「戻ろう・・・」

叢雲 「なかなか大漁だつたじやない」

エドワード 「そうでもないだろ」

金剛 「明日もF·i·s·h·i·n·gデース！」

エドワード 「このままじゃ海賊船ジャックドーは、漁船ジャック  
ドーになるぞ」

## M E M O R Y 0 2 『それで・・・ 食料は?』

ドクター 「夢ですか・・・ 興味深い・・・ 夢というものは一説には・・・「長くなるか?」

エドワード 「要点は?」

ドクター 「夢は秘宝が船長の記憶、脳にアクセスした結果でしょう。やはり秘宝が何かを再構成するのに設計図として記憶が必要なんじやないでしょうか? 夢に出てきた人物が船員をのぞいて生き返つていないと、いうのは気になりますが」

エドワード 「アドやアンが居ればもう少し楽もできただろうからな」

ドクター 「人を生き返らせるというのは特殊な条件が必要なのかも? だとすれば・・・ 血! 血統!!」

エドワード 「急に大声をあげるな!」

ドクター 「す、すいません。秘宝がトバカタストロフ以降の崩壊した世界を再生させるために作られたとすれば、イスにとって反乱を起こした作業用ロボットである人類は必要ないはずです! イスの血を継ぐものつまり血統としてのアサシンなら再生される世界に必要なものとされるはず!! です!!」

エドワード 「それだとクルーや叢雲、金剛はどうなんだ?」

ドクター 「人間じゃない!」

エドワード 「は!?」

ドクター 「そんな怖い顔しないでくださいよ・・・ 人間の定義とは、何をもつて人間なさしめるのか、なんて哲学的な話は置いておくとして。船員の人たちには親が誰で、どこで生まれ育つたとかその辺が無いんですよ。知識はあっても人としての物語が」

エドワード 「つまり役割以外のものは空っぽってことか」

ドクター 「その通り!」

ドクター 「でも、飲んで歌いますね。みんな」

エドワード 「それは 必要だ」

エドワード 「漂着者のほうは？」

ドクター 「不思議なことに。全員かすり傷一つないんです。意識レベルに関係なく。意識のある子たちも暴れたりもせず落ち着いてますね」

エドワード 「すぐに何かできそうか？」

ドクター 「船長の判断を聞いてからつて事で寝かせてありますけど、今のところは問題なさそうな子たちは何人か」

エドワード 「武器を取り、そう伝えろ」

ドクター 「えつ!? 深海棲艦ですよ!？」

エドワード 「常に有能な人材は求めてる」

——翌朝

エドワード 「言い出したのはお前だぞ」

叢雲 「そとは言つたけど、名前もないような奴らの面倒なんて見たことないわよ」

金剛 「ワタシもないデース！だからダイジヨーブデース！」

叢雲 「大丈夫な気が全然しないし！」

エドワード 「名前ぐらいいつけばいいだろ。面倒見るのはやる気の有りそなやつだけでいい」

エドワード 「頼んだぞ。お前らのほうがキャリアが長いだろ」

叢雲 「一週間も経つてないけどね！」

船員 「船長!! たいへんだあ!!」

叢雲 「落ち着きが無いのね」

エドワード 「落ち着けないが正解だ」

エドワード 「こいつは・・・?」

船員 「引き上げた死体でさあ」

エドワード 「でかい血溜まりにしか見えないが」

船員 「数が多いんでまとめて焚くか、流そうつて話だつたんだが、泡吹いて消えちまつた」

エドワード 「汚い人魚姫だ」

エドワード 「今はお前が主人か?」  
酒場の親父 「必要だろ?」

エドワード 「腕のいい料理人は船にこそ必要なんだが、それはいい。引き上げた深海棲艦を塩漬けにした樽があるだろう見せろ」

カバツ

酒場の親父 「こいつは酷え、血を貯めてたつもりはなかつたんだが」

エドワード 「殺されるな・・・俺が」

エドワード 「その武器は泡になつて消えないのか?」

船大工 「ああ、そうみてえだ」

エドワード 「随分な数だ。こいつを1人で面倒見るのか?」

船大工 「いや、妖精さんが手伝つてくれるんですさあ!」

エドワード 「小人の靴屋か？ 眠気が極限だと現れて手伝ってくれるやつか」

船大工 「今でも頑張って仕事してんのが見えないんですかい？」

エドワード 「休め」

エドワード 「これ以上 問題を 増やす な」

船大工 「違うんですつて！ 船長！」

エドワード 「あと半月で俺は死ぬ」

金剛 「W h y!？」

叢雲 「・・・いきなり何言い出すの？」

エドワード 「ビスケットは好きか？」

叢雲 「だから意味がわかんないって」

エドワード 「食料の残りは1ヶ月分。だが、誰もビスケットを陸に上がつてまで食いたくはない」

金剛 「ダイジヨーブデース！ 我慢出来マース」

叢雲 「不味くはあるけど耐えられないってわけじゃないし」

エドワード 「そいつは船員がウジの沸いてないビスケットをお前らに回してくれてるおかげだよ」「

「・・・・・」

エドワード 「それに耐えられるのが持つて半月、過ぎれば反乱が起きて俺が死ぬ」

叢雲 「うつ・・・ 結構切実ね」

エドワード 「そうだ。一週間以内に漂着組を何人か戦える状態にしておけ」

叢雲 「で？ あんたは？」

エドワード 「船を出す」

金剛 「Oh離れ離れデース」

叢雲 「はいはい・・・仕事にかかるわよ」

## M E M O R Y 0 3 『君の名は?』

エドワード 「帆をたため！ 繫留するぞ」

船員 「了解だ！ 船長！」

ドーンドン

エドワード 「射撃か」

金剛 「B u r n i n g L o v e !! 」 ダダダツ  
スツ

金剛 「Oh~ 今を避けますか」

エドワード 「向かつてきたら殺すか、避けるかだろ？」

エドワード 「で…… 何で今銃を持つてるのがドクターなんだ？」

」

ドン ドテツ ハハハハハ

叢雲 「そんなに腰が引けてたら当たり前よ」

ドクター 「やっぱり私はインドア派だから」

「(ゞ)注文は？ ラムでいいよね？」

ダンツ

「エールもワインもないんだけどね」

エドワード 「お前は？」

?? 「アリサ。 そこの親父が適當につけてくれた」

エドワード 「浜で銃を撃つてやらなかつたのか？」

アリサ 「あ、あれね、何ていうか。 軍艦の記憶つてやつ？ 全然ないんだ」

エドワード 「ただの記憶喪失つてことか」

アリサ 「そうそう！ 撃つてみたら何か思い出すかなと思つて、一発ぶつ放してみたけど何にも」

エドワード 「それで酒場の娘か」

アリサ 「まあね。 ベットでボーツとしてるのも趣味じゃないみたいだし」

グビグビ

??? 「死にそうな顔してお酒飲でも船員さん？」

エドワード 「船長だ」

??? 「じゃあ、あなたが提督さんつてこと？ 翔鶴型航空母艦2番艦、妹の瑞鶴です。

幸運の空母ですって？ そうじゃないの、一生懸命やつてるだけ： よ。

艦載機がある限り、負けないわ！」

エドワード 「エドワード・ケンウェイ。 海賊だ。 その意味不明な自己紹介はなんだ？」

瑞鶴 「それは、言わなきやいけない気がして」

エドワード 「記憶と意識の整理ができていなくてやつか」

瑞鶴 「冗談だと思つてたんだけど、ほんとに海賊なんだ」

エドワード 「ジャックドー、美しい船だろ？ マストの黒旗ただの飾りじやない」

瑞鶴 「犯罪者じゃん！ 爆撃されたいの!?」

エドワード 「やつてみろ……」

瑞鶴 「うつ…… 助けてくれたのはそりや感謝もしますけど……」

」

エドワード 「海賊に手はかせないか？」

瑞鶴 「誇り高き帝国海軍の翔鶴型の名前にかけて」

エドワード 「…… それでもいいさ。海賊稼業は開店休業中だからな」

瑞鶴 「深海棲艦とかのせい？ でもそれって秘宝とかを手に入れたから出なくなつてつて話じやないの？」

エドワード 「一つだと誰が言つた？」

瑞鶴 「そ、それって、秘宝を全部手に入れるまでこの島で籠の中の鳥！ いや鶴になつちやうわけ！」

——翌朝

チユンチユンチユン

??? 「おはよう。船長さん」

エドワード 「ん……あ？ 誰だ……？」

??? 「フフ、なんて呼びたい？」

エドワード 「その答えは予想外だな…… そうか……」

??? 「そうみたいね」

エドワード 「…… お前も艦か？」

??? 「さあ？ でも、みんなそうだからそうなんじゃない？」

エドワード 「キレイな黒い髪だ。 ラ・ダマ・ネグラつてのはどうだ？」

??? 「耳慣れない響きの言葉ね」

エドワード 「スペイン語だ。 The Black Lady、 黒い淑女つて意味だ」

??? 「いいかもね／＼ フフフ・・・ アツ」

エドワード 「あ？」

金剛 「ギギギギギギ・・・」

エドワード 「あつ」

金剛 「F U C K I N, B I T C H!!」

金剛 「ずるいデース！ ワタシも船長に名前をもらいたかったデース！」

エドワード 「自分で名乗つた名だろそいつは」

金剛 「ムキムキみたいなimageよりキレイな名前のほうがGoodデース！」

エドワード 「そうか？ ・・なら、金剛・・・エル・インポルト」

金剛 「どういう意味ですか？」

エドワード 「The Pristine、無垢なもの、傷のないもの」

金剛 「WOW！ ワタシのimageにぴつたりデース！」

ラダ 「へへ。 いい名前ね。 でも、長いからこれからはインポつて呼ぶわね！」

金剛 「じゃあワタシはBITCHをエネマグラつて呼んでやる

デース！」

ラダ 「・・・まあいいわ、私は仕事場に戻るわ」

金剛 「そうは問屋が卸しまセーン！一緒に訓練デース！かわ  
いがつてゲマース！」

ラダ 「あれは志願制のはじじゃ!?」

??? 「フン！ ハツ！ ハアアアア!! ・・・ハアハア」

エドワード 「どうした？ 続ける。 カトラスは両手で振るうも  
んじやないがな」

??? 「・・・ お前が噂の船長か？」

エドワード 「どんな噂は知らないが、エドワード・ケンウェイ船長  
だ」

??? 「木曾だ。 お前に最高の勝利を与えてやる」

エドワード 「ふん・・・ 勝利は自分で勝ち取りに行くさ」

木曾 「そうか、噂通り自信家だな」

エドワード 「そういうのは1人しか思いつかないが、そん  
な丁寧な言い方でもなかつただろ」

木曾 「『自信過剰ですごく偉そう！』 だそうだ。 でも、一流  
の船乗りだとは言つていたぞ」

エドワード 「フフツ・・・ なるほどな」

木曾 「だがな、指揮官としてはどうだ？ お前艦隊を率いた経験  
は？」

エドワード 「お前らが寄り集まつて艦隊と呼べるのかは疑問だ  
が・・・ ジヤックドーを除いて最高で15隻つてところか」

木曾 「水雷戦隊と同じぐらいか……期待はさせてもらえそうだ  
な」

木曾 「ついでだ、手合わせを頼めるか」

エドワード 「手加減はしてやる」 シヤツシヤツ

木曾 「一刀流かよ。よほど腕に覚えがあるみたいだな。 行くぜ

！」

ダツ

「え」 カン

「え・・・」 カキン

「え!」 キン バシユツ

エドワード 「筋は悪くない・・・ これからだろう」

木曾 「え・・・」 ゾクツ

エドワード 「分前の先払いだ持つていけ」

木曾 「いいのか？」

エドワード 「代わりの剣は飾つておくほどある」

エドワード 「やれそうか？」

叢雲 「あつ・・・ 訓練はするけど、やる気の向かう先がよく分かつてないって感じかしら」

エドワード 「敵が必要か？」

叢雲 「そう！ いや・・・まあ、そうか もね？ 戰つてたはずのアメリカはどうなつてるかもわかんないし」

エドワード 「・・・ 軍艦だからか」

叢雲 「逆に名前も思い出せない子たちはそういうのに引きずられないみたい」

エドワード 「何人か話してみたが、そうらしいな」

エドワード 「お前の方は？」

叢雲 「深海棲艦に、秘宝とかアサシン教団とかテンプル騎士団：よく分かつてないけど、アンタつて危なつかしいから」

エドワード 「そういう生き方しかできないんだ」

叢雲 「ほんと落ち着きが無いわね」

エドワード 「一つところで落ち着いて居られればいい父親にだつてなれると、言われたな」

叢雲 「そう言えば金剛が沈んでたけどなにかあつたの？」

エドワード 「さあ？ 娼婦と寝たことか？」

叢雲 「金剛のアレは冗談だと思つてたんだけど」

エドワード 「俺もだ」

エドワード 「こいつを見てもらえるか」

船大工 「ピストルソードですかい！ 懐かしい！ いつものカトラスは？」

エドワード 「やる気に満ちた若人に譲つたよ」

船大工 「変わっちゃいるがこいつもいい剣だ。 その辺のパーツで少しいじつてみても構いませんか？」

エドワード 「やれるだけやつてみてくれ」

船大工 「すつげえのにしてやりまさあ」

エドワード 「だが、休んでから触れ」

金剛 「H e y! 船長！」

エドワード 「眠れないか？」（英語）

金剛 「O h · · · · そつちのほうがいいですか？」

エドワード 「生まれてから死ぬまで使つてた言葉だからな」

金剛 「私はほとんど日本語の中で · · · 生きて？」

エドワード 「生きてでいいだろ？ 今を生きてるお前の記憶だ」

金剛 「今を · · · ほんとに生きてるんでしょうか？」

エドワード 「哲学的な話だな。二日酔いより辛そうだ」

金剛 「フフ。まあ、そうですね」

金剛 「記憶のない子達のほうが今を生きてるつて感じがしますね」

エドワード 「叢雲も似たようなことを言つていたな」

エドワード 「アサシンの血統と同じだな。不幸にもテンブル騎士団はのさばつたままだがな」

金剛 「血統？」

エドワード 「親父はただの農夫だったが、先祖がそ娘娘つたように俺もアサシンさ。聖書の時代から続いてる」

金剛 「使命のようなものですか、放り出したいと思つたことはないんですか？」

エドワード 「ないな。奴らが存在する限り」

エドワード 「叢雲はお前が思い詰めてた理由を娼婦と寝たせいだと勘違いしたままになるな」

金剛 「それはそれ、これはこれです · · · 」

エドワード 「ん · · · ? 」

## M E M O R Y 0 4 『新生艦隊』

叢雲 「・・・二日酔い？ ひつどい顔してるわよ」

エドワード 「二日酔いでこうはならない」

金剛 「P r i v a t eな話デース」

エドワード 「こいつを見てくれ」

金剛 「海図デスねー」

島

叢雲 「結構大きいわね」

エドワード 「オーストラリアまでの距離が、だいたい距離が南東  
1000海里ってところか」

叢雲 「近場ね」

エドワード 「敵さえ居なけりやな」

エドワード 「戦えそうなやつを集めろ」

金剛 「紹介しマース！ 右から瑞鶴、木曾デース！」

エドワード 「知ってる。 とは言え一人か？」

瑞鶴 「不服なわけ？」

叢雲 「文句言わないので。 すぐにやれそうなのって覚えてる子しかいないの！」

エドワード 「・・・まず、瑞鶴。 海賊に手を貸せないんじゃ？」

瑞鶴 「・・・ 少なくともこの島からはでられるでしょ？」

エドワード 「確かに。だが、出るなども言つてない」

木曾 「それマズインじゃないか？」

叢雲 「何が？」

木曾 「隠れ家の場所が漏れるとかそういうんだ」

エドワード 「ああ、それはない。 海賊仲間も品の交易路もないが、俺たちを追つてる敵も居ない」

木曾 「なら深海棲艦を追い出せば海は俺たちのものつてわけか」

エドワード 「やる気だな」

木曾 「お前のことは気に入つたよ。 特に俺と戦つてるときの目がな。ゾクゾクする」

叢雲 「・・・えつ？ なに、それ。 ・・・マゾ、なの？」

金剛 「O H ・・・ O H ・・・ 「ジトーツ

木曾 「おい！ その目を止めろ！ そういう意味じゃない！」

金剛 「そうだ！ 艦隊の名が欲しいデース！」

エドワード 「ケンウェイの交易艦隊」

瑞鶴 「冗談でしょ？」

叢雲 「センス無いわね」

木曾 「ナシだな」

金剛 「船長の名前が入るのは嬉しいデース ・・・ デーモー」

エドワード 「その目は、止めろ」

エドワード 「なら何がいい？」

木曾 「海賊・・・ 宇宙海賊クロスボーンバンガード」

叢雲 「海賊はわかる」

金剛 「クロスボーンバンガードもわかりマース」

瑞鶴 「でも・・・ 宇宙はどこからでてきたの？」

エドワード 「それに、うちの旗はAの記章に髑髏だ」

叢雲 「瑞鶴、あなたは何か案はないの？」

瑞鶴 「ううん。そうね、五航戦・・・ 翔鶴姉・・・ 翔鶴姉は

何がいいと思う？」

エドワード 「衝角なら俺も好きだぞ。順風に乗つて腹に穴を開ける快感は女には分からない」

金剛 「唐突な下ネタはStop it! デース！」

木曾 「つまり、船長の衝角が翔鶴姉に・・・」

瑞鶴 「ショウカク違いだから！ 翔鶴姉に謝りなさいよ！」

木曾 「居たら謝るぜ。 残念だがここには居ないようだけどな」

瑞鶴 「えつ!?」

「「「えつ!?」」

エドワード 「謝るようなことがあるか？」

叢雲 「あんたはとぼけるつもりね」

瑞鶴 「人に振る前に叢雲が案を出しなさいよ」

叢雲 「えつ・・・」

叢雲 「怒れるペロペロ分隊」

瑞鶴 「ブブ・・・ アハハハハハ！」

エドワード 「ククク こいつは酷い」

木曾 「ハツハツハ・・・ な、なんだ？ そのサイコロ降つて決めましたみたいな名前は」

金剛 「人にSenseが無いと言えないみたいデース！」

エドワード 「しばらくこの問題は棚上げだな。 だいたい『お前ら』で済むからな」

エドワード 「本題に戻ろう。今回の目的はオーストラリアで・・・  
「Vacationデース！」

瑞鶴 「いいわね！ 水着とか用意しなきや！」

木曾 「水着かー。俺に似合うのか？」

叢雲 「これでいいわけ？」

エドワード 「俺はこのままで泳げるさ」

叢雲 「そういう話じゃないから！」

エドワード 「出発までに準備しておけ」

ショーン 「やあ、偉大なるケンウェイ船長」

レベッカ 「ハイ、エドワード。 そう呼んでも構わないわよね  
？」

エドワード 「呼び方はなんでもいい。それで聞きたいことがある  
んだろう？」

エドワード 「だが、答えられることはそう多くはないぞ」

ショーン 「忘れてたよ。君は疑り深かった」

エドワード 「お前らが信頼できるのは記憶が教えてくれた。アナリストくんに感謝だな」

エドワード 「記憶が飛んでるんだ、テツサ結婚してから死ぬまで」

レベッカ 「それって、ヘイザムに伝わった遺伝記憶の範囲内ね」

エドワード 「俺自身の記憶の出所はそこだろうな」

ショーン 「悪いニュースはもう聞いた。それで？ いいニュースの方は当然あるんだろうね」

エドワード 「長くなるぞ」

エドワード 「いいニュースだつたか？」

ショーン 「オイ！ こいつは凄いぞ！ 神に感謝だ！」

レベッカ 「おお神よ！ 感謝します」

エドワード 「そこまでか？」

レベッカ 「深海棲艦との戦いは下手に戦力を持っていたからアメリカは悲惨よ」

ショーン 「倒せない相手に挑んだ世界の警察の自信は見事にボロボロ、沿岸部の都市もボロボロ」

レベッカ 「沿岸部近くで核兵器まで使つても勝てなかつたって話もあるの」

エドワード 「奴らに唯一対抗できる戦力は教団が握っている」

ショーン 「とまあそう甘くは無いだろうけどね」

エドワード 「騎士団も秘宝を手に入れるか、手に入れてるだろうな」

レベツカ 「それについては調査中。 海の底や火山の中に捨てられたんだからそう簡単には見つけられないわよ」

エドワード 「たとえ火の中水の中つてわけか」

ショーン 「素潜りは得意分野だろ?」

エドワード 「俺は水深何mに潜ればいい?」

エドワード 「それよりも今は当面の食料だ」

レベツカ 「さすがの大海賊も交易網が死んでればお手上げつてことね」

ショーン 「近いってほどでも無いが、今オーストラリアにはアサシンの船が居るはずだ。連絡を取つてみよう」

エドワード 「小麦やそば、穀類と砂糖、あと酒が最優先だ。」

ショーン 「飲まないと死ぬわけじやあるまいし」

エドワード 「死にはしないが、殺される。 そつちの用意にかかわらず2週間後にはブリスベンへ向かう」

エドワード 「宝探しはその後でいいだろう」

# M E M O R Y 0 5 『アポカリバス』

バタバタ

木曾 「オー！ オー・・・ スゲエ」 バタバタ

エドワード 「はしゃぐのは構わないが、入江を出たら全速力を出す。大事な帽子を落とすなよ」

木曾 「全速力って言つても帆船だろ？」

エドワード 「フン、どうだらうな？」

エドワード 「スタンスルを張れ！ この風に乗るぞ！」  
ブワン

木曾 「オツと！」 バサツ

エドワード 「ずいぶん高く舞い上がつたな・・・

瑞鶴 「瑞鶴！」

瑞鶴 「え？ あつ！ 艦載機発艦はじめ！」

ブーン バサツ

エドワード 「便利だな。カンサイジン」

瑞鶴 「便利に使つたのは船長さんでしょ！ それに艦載機よ！」

木曾 「ありがとよ」

瑞鶴 「どういたしまして」

エドワード 「瑞鶴。面白い芸を持つてるのはわかつたが、直接敵を射抜いたほうが手つ取り早いだろ？」

瑞鶴 「それつて・・・ 特攻そんな酷いことできるわけないじゃない！」

エドワード 「酷い？」

木曾 「それは聞き捨てならないな」

叢雲 「妖精さんがかわいそうだと思わないの!?」

金剛 「それはVERY VERY BADデース」

エドワード 「まさか!? お前らもか!? 」

エドワード 「話をまとめると、妖精さんはお前らが艦だとすると乗組員のようなもので、俺には見えないと」

金剛 「そうなりマース」

エドワード 「なら、俺や船員も妖精さんか?」

叢雲 「むつきい妖精も居たもんよね」

木曾 「違うと思うがな」

瑞鶴 「ちっちゃい船長さんが耳元で命令してるの想像しちゃつた・・・何かすごく嫌」

金剛 「ワタシは歓迎しマース」

瑞鶴 「金剛さん。あなたは少しおかしいんですから、自覚してください」

エドワード 「どうやつたら見えるんだ?」

瑞鶴 「歩き方を教えてくれみたいな話ね」

叢雲 「タカの眼があるんでしょ?」

エドワード 「ああ! 忘れてたよ」

エドワード 「おお・・・ ウェールズ出身の俺でも初めてみたよ

瑞鶴 「ね? こんな可愛い子たちを死に行かせられる?」

エドワード 「可愛さは関係無が・・・ レヴァント流だな」

見張り 「敵が見えたぞ―――!!!」

エドワード 「4・・・5匹か。ちょうどいい。おい！ やれるな」

叢雲 「当然よ」

木曾 「初めての実戦か血がたぎるぜ」

エドワード 「叢雲と金剛は新米のバツクアッパだ！ 二人に任せ  
てやれ！」

叢雲 「あんたは!?」

エドワード 「ジャツクドーの砲撃じや巻き込むだろ？」

叢雲 「前私たちが戦つてる最中に撃ち込んだわよね？」

エドワード 「・・・ 暴れてこい！」

叢雲 「出撃するわ！」

金剛 「提督のハートを掴むのは、私デース！」

瑞鶴 「空母瑞鶴、抜錨します」

木曾 「本当の戦闘つてヤツを、教えてやるよ」

エドワード 「・・・なるほど、艦載機はああやつて使うのか」

見張り 「船長！ 戰闘から離れる敵がいるぞ！ なんか気持ちの  
悪いやつだ！」

エドワード 「は？ ・・確かに気持ち悪いな。 あいつを追うぞ

！」

船員 「追いついたぞ！」

エドワード 「何か抱えてる分、足は遅いらしいな。 ヤードを空けろ！ ロープダートで吊るすぞ！」

シユピン ガシユツ ダン ギリギリ バタバタ： ガクツ

エドワード 「一応首はついてたのか・・・さてこの妊婦みたいな腹の中何が詰まってるかだ」

船員 「裂くんですかい？ こいつを・・・」

ザシユ ボドボド ビシヤツ！

エドワード 「少し、後悔したよ」

叢雲 「作戦完了ね。艦隊が帰投したわ」

瑞鶴 「出る時はいいけど船の横から登るのって結構大変よね」

金剛 「O H！ 船長血が！ 血まみれデース！」

エドワード 「俺の血ならもう死んでるさ」

木曾 「何があつたんだ？」

エドワード 「アレだよ」

木曾 「アンコウの吊るし切りか？」

エドワード 「覚悟して見ろよ」

エドワード 「吐き気は収まったか？」

瑞鶴 「何だつたのよアレは!?」

エドワード 「深海棲艦の腹を割いたら人のものらしいぶつ切りの

死体が山と出てきた

金剛 「G o d d a m n！」

叢雲 「ウツ・・・ ぶり返してきちゃつた」

木曾 「あいつらは人を、食うのかよ？」  
エドワード 「お前らは見ていないだろうが駆逐艦の腹からも死体  
が出てきたぞ。これほどの数じやなかつたが」

瑞鶴 「せめて弔つてあげられない？」

木曾 「だがこのままにもできないだろ？」

エドワード 「水葬にしても奴らの胃の中だぞ？」

叢雲 「陸まで持つていって焼くか埋めるのも時間が掛かるし」

金剛 「水葬デスねー・・・」

エドワード 「眠れ安らかに・・・」

・・・・・

エドワード 「それで初陣の感想は？」

瑞鶴 「あつ・・・ ???」

木曾 「アレの衝撃が強すぎて忘れちまつたな」

瑞鶴 「わざわざ死体のお腹を切る意味つてあるわけ？ そつとしておけばいいじゃない」

エドワード 「聞いてないのか？ 金剛はあの中から出てきたぞ？」

「 金剛 「O H S M y M o t h e r : : 売つけわいけない人に  
けんかを売ったせいで・・・ サメザメ」

叢雲 「アレ倒したのは私だけどね」

金剛 「親の仇ネ！」

木曾 「気持ちの悪い話だな」

金剛 「イナグアに居るG i r l sたちはみんな同じのような気が  
しマース」

見張り 「陸だ！ 陸が見えたぞ――！」

木曾 「鳩とか飛ばすんじゃないのか？」

エドワード 「未開の海を探検する訳じやない」

金剛 「むしろ鳥が飛ばしマース！」

瑞鶴 「誰が鳥よ！」

叢雲 「ああ！ 艦載機！」

船員 「船長が・・・！ 海に!!」

叢雲 「落ちたの!?」

バシヤバシヤ

木曾 「ひと泳ぎ・・・ してるつ！」

エドワード 「片付けは済ませておいたぞ」

木曾 「こんなところにも深海棲艦つて居るんだな」

叢雲 「どこの沿岸部も同じじゃないかしら、地震と津波で壊された街と深海棲艦」

金剛 「世知辛い世の中マース・・・」

瑞鶴 「ひどい場所だし、人の気配も全然ないわよね」

エドワード 「地震で潰れた、津波で流された、深海棲艦に食われた、食い物がなくて飢えた、争いで殺された」

金剛 「居なくなる理由はいくらでもありマース」

木曾 「生きてる人間つていんのか？」

叢雲 「まともに生きてる人間つて周りじやドクターぐらいじやないの？」

エドワード 「今は人類のことを考えるより自分たちの事を考えたほうがいい。さあ、食えるものを探すぞ」

木曾 「収穫は？」

金剛 「Marketの食料が手付かずだつたようデース」

エドワード 「普通なら真っ先になくなつてそうだが……」

叢雲 「あんなものが居たんじや人も近づけないでしちゃうね」

瑞鶴 「海賊つてより火事場泥棒だよね」

ザー——

木曾 「壊れてんのか？」

瑞鶴 「ラジオでニュースでも聞けるかと思つたんだけど……」

叢雲 「見つけてきたつて無駄よ。だいたい壊れてるわ。理由はドクターが長々と話してくれたけど忘れちやつた」

エドワード 「太陽フレアのせいらしい」

金剛 「これからはどうしマス？」

エドワード 「味方を探そう」

瑞鶴 「居るの？」

木曾 「大陸だし内陸には誰かは生き残つてんだろう？」

エドワード 「少なくとも仲間の船が居るらしい、アルタイルII  
と言つたか」

木曾 「海賊仲間か？」

エドワード 「いや、もう1つの方だ」

叢雲 「アサシン教団・・・」

S E Q U E N C E 04 『アサシン海賊が鎮守府に着任しました』

## MEMORY01 『二人の叢雲』

叢雲 「あんたが司令官ね。 ま、せいぜい頑張りなさい！」

エドワード 「ケンウェイ船長だ」

叢雲 「は？」

エドワード 「いや、いい」

叢雲 「何あんた寝ぼけてるの!?」

エドワード 「書類仕事は向いてないんだ」

叢雲 「私が秘書艦になつたからには深海棲艦殲滅までそんなこと言わせないから」

エドワード 「殲滅か……」

叢雲 「それが全人類の全艦娘の悲願よ！」

エドワード 「勇んでいるところ悪いが、今のところ1人で訓練ぐら  
いしかやれることがない」

叢雲 「書類仕事は？」

エドワード 「終わった」

叢雲 「建造は？」

エドワード 「申請は出した。こつちに配属されるのは明日だ」

・・・・・

エドワード 「なあ、叢雲」

叢雲 「なによ」

エドワード 「呼んだだけだ」

叢雲 「何よ突然気持ち悪いわね」

エドワード 「まあ、今日の仕事は終わりだ」

船員 「よう船長、お勤めご苦労様です」

エドワード 「収監されたわけじやないんだがな」

——ジャックドー船長室

エドワード 「なあ、叢雲」

叢雲 「なによ」

エドワード 「呼んだだけだ」

叢雲 「愛を語りたいならベッドの中にしてくれさる？」

エドワード 「な？」

叢雲 「一体何の同意を求めてんのよ？ つて何か有るでしょ!?  
鎮守府に着任初日なんだから」

エドワード 「第一艦隊旗艦を秘書艦と呼ぶらしいが、そいつが叢  
雲だ」

叢雲 「私なの!?」

エドワード 「お前じやないお前だ。 会つたばかりの頃と同じ  
顔、同じ服に同じ儀装」

叢雲 「今は服も儀装もだいぶ変わつりやつてるけどね」

エドワード 「顔つきも凶悪になつた」

叢雲 「誰のせいだ！」

叢雲 「私じゃない私と聞くとホラーみたいね」

エドワード 「死者が蘇つてゐるんだ。最初からホラーだよ」

叢雲 「一緒の艦隊とかになつたら、うまくやれるのかしらね？」

エドワード 「同じ鎮守府にはなつても同じ艦隊にはならない規則がある。命令とかややこしいだろ」

叢雲 「なら別にコードネームを付ければ良くない。プリステインとかみみたいに」

エドワード 「さあな？ 意味があるんだろ。無意味なことをするような奴らじやない」

木曾 「ああ、おかえり船長。それとも司令官とか提督つて呼んだほうがいいか」

エドワード 「船長のままのほうが落ち着くよ」

瑞鶴 「導師様つてのもあるけど」

エドワード 「それは本気で呼ばれるとかなり恥ずかしいな」

エドワード 「そのプリステインは姿を見せないが？」

木曾 「ああ、金剛かそう呼ぶのは船長かラダぐらいだから忘れそうになるぜ」

叢雲 「潜入チームだからオリジナルの艦装に戻すから。アンと別れを惜しんでるのよ」

エドワード 「今生の別れというわけでもないがな」

瑞鶴 「寂しいんでしょ。2年間ずっとといに居たんだし」

木曾 「それで潜入のため準備つて今どうなつてゐるんだ？」

叢雲 「艦装の方はだいたいリビルトが終わつてゐるみたいだけど」

エドワード 「偽造書類のほうはまだだな」

木曾 「まともなやつがボスだといいんだがな」

叢雲 「優秀すぎても、バレたら死ぬんだけどね」

瑞鶴 「私だけ仲間はずれ・・・ ふてくされるぞ！」

エドワード 「今はまだ待つてろ。翔鶴型の空母はまだ存在も確認されてないんだ」

叢雲 「それに切った髪も伸びるまで待たなきやよね」

瑞鶴 「じゃあ、他の人とかになりますっていうのは？」

木曾 「瑞鳳とか、龍驤とかか？」

エドワード 「へえ、その心は？」

叢雲 「ひんー

瑞鶴 「言わせないわよ！」

金剛 「船長、帰つたなら一番に教えてほしかつたデース」

エドワード 「お別れ会でもやつてたんじゃないのか？」

金剛 「それは置いてもこれデース！」 ババーン

叢雲 「これは艦娘の調査票よね？」

瑞鶴 「あれ？ それぞれ艦娘の癖とか好みとかが書いてあるやつよね」

木曾 「潜入工作の必需品だな」

エドワード 「・・・別におかしなところはないはずだ。おかしいかどうかかも俺には分からぬが」

金剛 「B u r n i n g L o v e!!とか 提督のハートを掴むの

は、私のデース！ とか」

エドワード 「それが？」

金剛 「そんなの言えまセーン」

叢雲

「…え？ 言つてたじやない最近は聞かなくなつたけど」

金剛 「誰でもいいわけじやないんですよ？」

瑞鶴 「よくわかんないんだけど船長さんなさいの？ 好きになる要素がないんだけど、サディスティックなどこが好きとかじやあるまいし」

木曾 「だから俺をマゾみたいにいうな！」

金剛 「What…顔」

エドワード 「否定できないなそれは」

叢雲 「普通優しいところとかそういう事言わない？」

金剛 「優しい人はFire Shipなんて戦術を考えまセー

ン」

エドワード 「それは俺の目の前でする話か？」

## M E M O R Y 0 2 『修練の賜物』

ラダ 「好きでもない男を落とす方法を教えてやれって？」

エドワード 「必要ならな」

ラダ 「そんな事よりこつちよ」

エドワード 「なんだ？ この紙は随分な金額が書いてあるな」

ラダ 「可愛い女の子が沢山の鎮守府で必要になるものは何？ ヒントはその女の子たちには手を出せない」

エドワード 「なるほどな。 それでわざわざ日本までついてきたわけだ」

ラダ 「そうよ。 イタリアの大導師エツィオ・アウディトーレを支えたクラウディアみたいにね」

エドワード 「嬉しいよ。 だが、この金額を二つ返事というわけにはいかないな」

ラダ 「そう？ まず、高級将校の心を掴むためには一流のものを取り揃えないといけないの、わかる？」

エドワード 「それだけじゃないだろ？」

ラダ 「娼婦の教育だって必要なイナグアではドクターが空いた時間なんかにやつてくれてたけど。それに生活費も、これが大変ですね・・・」

エドワード 「スラムで汚い格好の奴は浮浪罪ですぐに消えるからな」

ラダ 「そういうこと♪」

エドワード 「それの消えた先を突き止めるのは俺のしごとか」

ラダ 「・・・楽な仕事じゃないでしようね」

エドワード 「覚悟はしてるさ」

——鎮守府

神通 「あの・・・ 軽巡洋艦、神通です。どうか、よろしくお願ひ

致します・・・」

エドワード 「ああ、よろしく」

叢雲 「叢雲よ。よろしくお願ひします」

叢雲 「これでうちの艦隊も二人目ね。艦隊らしくなるにはまだ足りないけど」

エドワード 「訓練ならマシなのができるようになるだろ」

神通 「良ければ・・・ですが、私が指導しましようか?」

エドワード 「対して違いはないだろうが、叢雲のほうが先任だろ?」

叢雲 「先任つていつも艦娘に階級はないわよ。船としての格つて意味なら軽巡洋艦のほうが格上だけどね」

エドワード 「だから敬語なのか」

叢雲 「そうよ。敬意は払わないとね」

エドワード 「俺には?」

叢雲 「ないわ」

エドワード 「神通、訓練は任せた。めいっぱいやってくれて構

わん」

神通 「了解しました!」 「ビンツ

叢雲 「え?」

――ジャックドー船長室

エドワード 「チツ・・・」

瑞鶴 「珍しくもないけど不機嫌そうね。船長さん」

エドワード 「叢雲」

叢雲 「何よ? また呼ん――」 「バン! バン!」

木曾 「ぶつ放しやがつた……！」

瑞鶴 「え!? 急に撃ち合いを始めるほどのことがあつたの？」

金剛 「割りとあるといえればありマース」

叢雲 「なにすんのよ！」

エドワード 「艦娘にはこれができないらしい」

叢雲 「これ？」

エドワード 「お前は撃たれた弾をよけて、すぐに撃ち返した」

叢雲 「反射でそうするでしょ！ 私だけじゃない誰だつてそうするわよ！」

エドワード 「お前らは艦娘以前にアサシンになりすぎた」

「〔〔〔〔〔〕へへへへ・・・・・・・・〕〕〕」

エドワード 「随分嬉しそうだな。 舞い上がつてるとこ悪いが――」

叢雲 「別に喜んでなんかないしつ！」

エドワード 「その反射を消せ」

木曾 「・・・ 弾に当たる訓練をしろつてことか!?」

金剛 「F U C K I N , C R A Z Y !」

瑞鶴 「冗談じやない！」

叢雲 「理由ぐらい聞いてあげなくはないわよ」

エドワード 「艦隊戦での反射がでれば疑われるぞ。 ついでに、敵を盾にして弾を防いだりもしない」

叢雲 「紛れるための基本は自分の特異性を消すこと、ね」

エドワード 「腹の中身や血を撒き散らすほうが、命を撒き散らすよりましだろ？」

叢雲 「血が一番マシね。」

瑞鶴 「血のほうが嫌じやない？」

金剛 「どつちもノーセンキュー、デース！」

木曾 「俺はどつちでも……」ゴクリ

エドワード 「どうするべきなのか分からぬから、こいつがある」

木曾 「イベントのチラシか」

金剛 「WOW 観艦式デース！」

エドワード 「初めて一般公開されるらしい、艦娘同士の模擬戦やサプライズで深海棲艦を沈めるって企画もあるらしい」

叢雲 「人なんて集まるのかしらね？」

瑞鶴 「人類の希望つてのを見たい人は多いんじゃない？」

エドワード 「見たいと集まれるは別物だがな」

金剛 「それでも、軍の関係者はいっぱい来マース！ Targe  
t がいるかも知れまセーン」

エドワード 「そいつも含めて無駄足にはならないさ」